

タンク山から下山するため、チョコレート階段に向かうとき、下から2人組の中年男性が登ってくる。首から一眼レフを下げ、手には事件現場を記す雑誌の地図のコピーをもっている。この男性も、まわりの視線を気にしながら事件現場を訪れており、筆者があたかも地元住人であるかのように、堂々と振る舞っていると、視線を避けるようにそそくさと登っていった。

## 6. 友が丘中学校

タンク山を下り、淳くんの頭部をおいた「友が丘中学校」へと向かう。報道では、学校側が、校門撤去をしようという動きがあったということを知っていたため、どうなっているのだろうと不安であった。体育館脇の小さな門を改築し、そこを校門としている様子がうかがわれたが、頭部がおかれていた正門も、現在利用されており、そこを利用している男子生徒がいた。

ここにきて一番驚いたことは、友が丘中学校の正門は、車道が下を走っており、歩道のみがあるような、人通りの少ない道路に面しているところである。少年はどういった意図で学校の正門に頭部をおいたのか、すぐに理解することはできなかった。多くの人に、自分の存在を示すためではなく、少年の生活世界の中での存在を示すためだったのか。

生徒たちは12:45頃にもかかわらず、部活動をしていたり、帰宅する生徒がいたので、中間テストの最終日であることが予測される。改築された方の校門付近には、男子生徒が10人くらいおり、校門に腰掛け、ふざけ合いながら話をしている。服装の乱れも見られず、髪の毛も黒髪の生徒ばかりである。

女子生徒に目を向けると、やはりスカートの丈は標準で膝下、靴下も白のハイソックスと、学校の規定通りの服装ばかりである。

道路に面したところに、テニスコートがあり、男子テニス部が練習をしている。驚いたことに、友が丘中学校のテニス部は硬式テニスで、公立中学校に硬式テニス部が存在することはいまだ珍しい。そして、練習している男子部員の中で、小さい頃からテニススクール通いをしているであろう生徒が多いことも予測される。幼稚園のお迎えの車といい、小さい頃からテニスを習わせている点など、この付近の住人が、かなり階層的に高い様子がうかがえる。

友が丘中学校には、すでに少年と同学年の生徒は卒業しており、在籍していないため

か、あまり事件のことを引きずっているようには見えない。事件後に見られた、校門前の献花もなく、学校側も生徒も事件を忘れようとしているのか。

しかし、よそ者の筆者を認知すると、「何者だ、お前」という視線が飛んでくる。そんな冷たい視線に耐えられず、学校の様子を観察することもあまりできず、その場を後にした。

ここからも見上げれば、タンク山が目飛び込んでくる。

## 7. 名谷駅付近

友が丘中学校を逃げるように後にし、名谷駅へ向かう。名谷駅へ向かう「名谷竜が台東住宅」や「落合団地」はその名の通り、団地やマンションが建ち並ぶ。むしろこの辺の地域の方が、少年の居住地付近と比べ、ニュータウンとして指摘される無機質・平然と並んだ高層マンション・造られた街というイメージである。

駅前にはパティオ（ショッピングモール）、ダイエー、大丸が並び、駅前はかなりにぎわっている。その駅前には、広場があり、明るい雰囲気である。筆者は少年が利用したであろうマクドナルドで昼食をとる。小さな子どもを連れのお母さんや、高校生で店にはぎわっている。

少年は、この席に座り、友たちといっしょにハンバーガーを食べたのか。または、1人でポテトをほおばったのか。一部の評論家は、須磨ニュータウンの特殊性は、ニュータウン内にコンビニや店がなく、子どもたちの隠れ家となるような群れる場がなく、子どもたちが線で行動しているといっている。たとえば、こういう表現が在る。

「須磨のニュータウンが非常に特殊だなと感じた点は、駅前にしかお店がなかったことです。これは相当異常な街であることを意味しています。……お店は重要な癒しの場所となるわけです。そういった場所が須磨には駅前にしかないというのは、ニュータウンの中でも特殊なケースです。……須磨の場合、途中で店がないから、大人は車で駅前のスーパーやコープまで現在地から疾走し、子供だって中間に寄り道する場所がまったくないから、チャリンコで目的地まで疾走するしかないんですね。」(宮台真司、1997)。

しかし、地方に住む子どもにとって、線で行動することは必然であって、特殊であるとは筆者は考えられない。実際、筆者の小学生時代、中学生時代を振り返っても、自分

の居住地域でたたくことはなく、少年と同様自転車で駅前に行き、駅前の店で遊んでいた事実がある。何をもって、彼が特殊性であるとしたのかが、理解できない、ということはこの場に来て実感した。

神戸市の地図を広げ、今まで来た道を振り返る。しかし、どうも自分の中で、何かをつかみたいと思っていたのにもかかわらず、他人の視線は少し気になるが、かえって居心地が良すぎる雰囲気を感じていたのも、何か物足りなさを感じた。そこで、もう一度、来た道に戻り、もう一度少年の視点を意識して、北須磨団地へと向かうことを決心した。

もう一つ戻ろうと思った理由に、連続通り魔事件の現場に行ってみたいと思ったのも理由である。

## 8. 竜が台小学校

名谷駅から名谷環状線を南に進む。友が丘中学校から名谷駅の区域は、ほとんどがマンションで埋め尽くされている。名谷環状線沿いには「名谷団地」がある。同じような風景が続く。道路を南に進むと、右手に白い壁が現れる。竜が台小学校である。多井燭小学校と異なり、竜が台小学校は道路よりも高い位置にあるため、その内部は車道からは全く見ることはできない。3メートルほどの高さの階段を登り切ると、小学校が見えてくる。学校の周りは、一軒家と団地に囲まれているが、人通りはあまりない。

彩花ちゃんが襲われた通りは、学校からすぐの場所である。

竜が台小学校は、学校内部に不透明な場所が多く、学校敷地の隅の校舎の陰で、なにやらお菓子を食べている、少し格好をつけている男子児童がいる。また、この付近の学校に掲げられている標語が1番多いのも、この学校であった。

土臭く、昔からの学校という雰囲気がする。多井燭小学校は可視性があり、竜が台小学校は不可視性、という特徴の差異があげられる。また、ある意味、児童層が多種多様在籍している雰囲気があり、竜が台小学校区内にある、マンション・団地が異種の階層性をはらんでいることがわかる。

## 9. タンク山～北須磨団地～北須磨公園

タンク山に再び登る。2度目ということでもたまたま違う視点でタンク山を観察した。最初は、事件の衝撃と、現場であるという先入観を持ったまま入り込んだので、今回は、事件現場であるということを極力排除して観察した。

やはり惹かれるのは、森の闇が包み込む神秘の世界である。空想がかき立てられ、子どもの頃の物語があふれてくる。秘密基地や、探検と称して遊んできた物語が……。この闇の中、少年は何を思い、何に恐怖を覚えていたのだろう。自分を飲み込むかもしれないと想像した母親から逃げたかったのか……。

北須磨団地内を歩く。須磨ニュータウン内で第1次入居がなされた北須磨団地で、その最初の入居が30年前であるということを物語るように、その当時の建物が目立つ。また、一軒家が立ち並ぶこの区域は、よく手入れされた植木や、ガーデニングを楽しむ主婦が多い。

やはり、この区域からも、よくタンク山が望める。

北須磨団地内から北須磨公園に向かう。先ほどは見えなかったが、公園に隣接するように、仮設住宅が建てられている（写真34）。はじめて神戸震災の傷跡を見た。

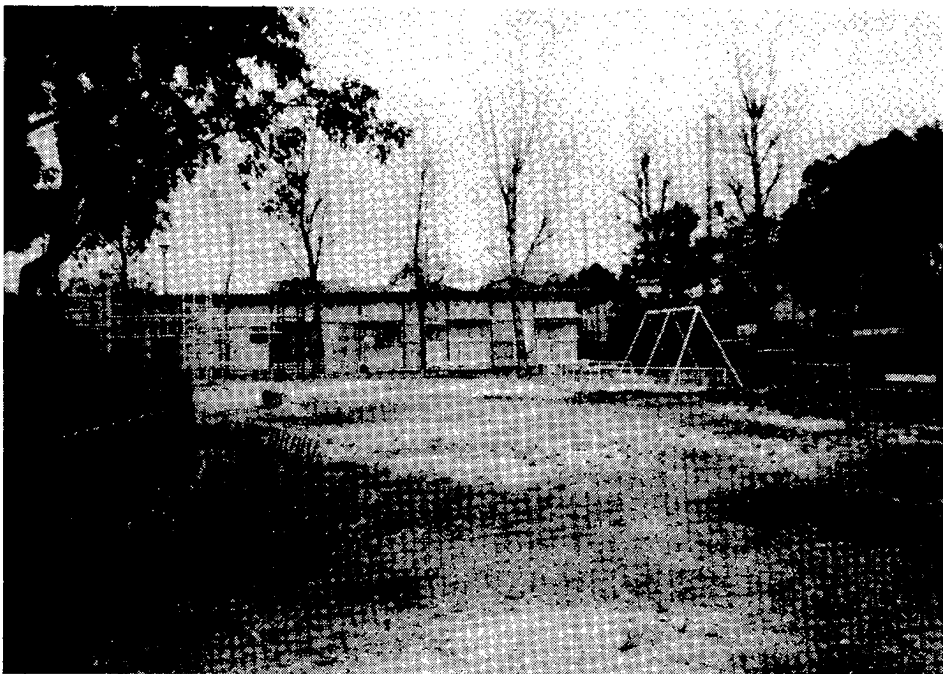


写真34 今でも大震災の罹災者の住む仮設プレハブ住宅。

この公園に、土管のようなものがあり、遠くから見ると中にスプレーでいたずら書きがされている。このいたずら書きを見ようと近づくと、土管内に友が丘中学校の男子生徒がいた。彼は、一点をのぞき込むように土管の中で息を潜めている。しばらくすると、彼は視線を感じたのか、こちらをギロツとにらんだ。筆者は、彼の鋭い視線にたじろぎ、慌てて、土管から遠ざかる。この男子生徒は、まさしく、2年前の少年であったのではと感じた。

誰もいない公園、笑い声がない公園の中で、すでに1人しかいない状況で、敢えてカプセルの中に入り込み、外からの刺激を遮断し、1人の殻に閉じこもる。彼の唯一安らげる場所なのか。外からの襲撃者に牙をむけ、彼は何を考えていたのだろうか……。

参考・引用文献：

高山文彦『地獄の季節』、新潮社、1998

松原隆一郎「歪んだユートピア『ニュータウン』」『好奇心ブック7 神戸事件でわかったニッポン』双葉社、PP.51-54、1997

宮台真司「ニュータウンは家族・子供に何をもたらしたのか」『好奇心ブック7 神戸事件でわかったニッポン』双葉社、PP.55-57、1997

朝日新聞社大阪社会部編『暗い森』朝日新聞社、1998

宮台真司『透明な存在の不透明な悪意』春秋社、1997

児童心理別冊『神戸小学生殺害事件 事件の背景とこれからの教育を考える』金子書房、1997